

2. 事業の目的と概要	
(1) 上位目標	ウムズンベ自治区における若者の経済・社会参加の増大
(2) 事業の必要性（背景）	<p>(ア) <u>対象地域における若者の低学力と失業問題</u></p> <p>民主主義国家として再出発し 20 年を経た南アフリカ共和国は、豊富な鉱物資源を基盤に中進国へと発展を遂げてきた一方で、社会・経済格差はさらに拡大し、国の発展から取り残された地域や人々が多く存在する。特に、若者の失業率（全国 53.6%）は深刻な問題となっている。</p> <p>当会が 2013 年より教育支援事業を行っているクワズールー・ナタール州南部のウグ郡内ウムズンベ自治区は、若者（15-34 歳）の失業率が 62.6%（全国 179 自治体中 8 位）と、若者失業問題をかかえる典型的な遠隔地域である。産業が未発達で、唯一の産業であるさとうきび栽培は、季節労働者しか雇用しない。また、地域には農村もなく、伝統的に行われてきた放牧も自活できるほど発展しておらず、自給自足レベルでも若者が働く場がない。このため、対象地域の若者の 60%以上が、労働市場においても伝統的生業においても経済活動を行わず、祖父母の年金に頼り、たまにあるピースジョブでかろうじて食いつないでいる。</p> <p>若者失業率の高さは、彼らの低学力も大きな原因となっている。地域全体の学力レベルが低く（全住民中、高校進学者 43.3%、高校卒業者 10.2%、大学教育修了者 0.7%）⁽¹⁾人々の教育の重要性への認識が希薄ななか、学校教育設備が貧弱で、教師の意識や力量も十分ではないため、若者は基礎学力や技術を習得せずに卒業し、進学や就職ができない状態にある。健全な地域社会の発展のためには、教育は喫緊の課題であるが、予算不足のなか、年々学童数が増加している状況で、州教育省は適切に対応できない状態が続いている。</p> <p>(イ) <u>小学校 4 年からの英語で行われる授業についていけなくなる問題</u></p> <p>特に深刻なのが英語力不足である。南アフリカ共和国は多民族国家で公用語が 11 言語あるが、社会では一般的に英語が共通言語として使われるため、英語力がないと就職はもちろんのこと社会参加が難しい。また、小学校 4 年からは全教科の授業は英語で行われるため、英語力は学びの基盤となる。低学年のうちに基礎的な英語の読み書き能力を身につけないと、その後の授業が理解できず、総合的な学力の積み重ねができなくなる。母語が英語でない対象地域においては、本来は十分な母語の習得と同時に十分な英語の読み書き教育が必要であるが、上記の通り教育設備や教材の不足により、基礎的な英語力がないまま小学校 4 年に進み、その後の授業についていけない生徒を多数生み出している。特に英語による算数の授業が理解できない生徒が多く、基礎的な計算ができないまま高校へ進み、小学校低学年レベルの算数能力で学業を終える若者が多い。教育レベルの国際比較においては、南アの数学力は最下層に位置する統計⁽²⁾や、Grade 8 の算数学力の平均を 500 としたときに、南アの Grade 9 の算数の学力が 352 しかないというデータ⁽³⁾もあり、他のアフリカ諸国と比べても数学のレベルが低く、深刻な問題といえる。</p> <p>(ウ) <u>現行事業の成果と課題</u></p> <p>現行事業（2016 年 3 月～2017 年 2 月）は、卒業後の社会参加の可能性を高めることを目的に、自治区内 161 校（プライマリー109 校／セカンダリー52 校）のうちの 30 校（プライマリー16 校／セカンダリー14 校）を対象に、図書室を活用した英語力向上およびパソコン技術指導を行っている。本や教材</p>

が不足しているなか、「ブックボックス」で図書を学校間で巡回貸し出しをするなど工夫することにより、生徒達は多くのジャンルの本に触れ、積極的に本を読むようになってきている。また、英語の読み書き能力が比較的の高い生徒が他の生徒に教えるピア教育も始まり、生徒たちが主体的に関わるようになってきた。パソコン技術指導においては、セカンダリー10校の図書室にパソコンを一台ずつ設置してリソースセンターとして改善し、TAAA パソコン指導員が巡回指導をしている。一台のパソコンでの指導では限界はあるが、紙にキーボードを描いてタイピングの練習をさせるなど創意工夫でなるべく多くの生徒たちが基本技術を習得できるシステムを作りながら指導している。生徒たち全員が今まで一度もパソコンに触れたことがなく、積極的に基礎技術を学んでおり、対象校からは大変喜ばれている。とくに、今年卒業の12年生は、進学や就職をする際に、履歴書やレポートをパソコンで作成する必要があるため、簡単なパソコン技術習得の機会を得たことは、進路を拓く第一歩となった。

図書室と生徒たちの力量を有効活用した英語力向上とパソコン技術指導は、限られた教育予算のなか、スペースも教員も不足している学校が多い同自治区およびウグ郡において、無理なく持続し普及できるモデルケースとして発展する可能性がある。

しかし、当事業を進めるなかで、いくつかの課題もみえてきた。

(1) 図書室充実の必要性

同自治区は生徒数の増加によりスペース不足に悩まされている学校が多くなってきている。現行事業の対象校のなかにも、図書室を作るスペースがなく、職員室に本棚をおいて図書を並べるのが精一杯の学校もあり、図書室のスペース増設が必要である。また、図書室のある学校は、蔵書は増えたが、本の種類が不足しており、生徒たちの多様なニーズに応えられていない。とくに、高校生でも基礎英語力のない生徒が多い一方、小学生でも読解力の高い生徒もいるので、各校に様々なレベルやジャンルの本が必要である。

(2) 小4問題への対応

(イ)で説明した通り、小学校4年からの英語による授業についていけずに、急激に理解力が低下し、その後の学力が停滞したまま高校生になる生徒が多い。この「小4問題」がこの地域の若者の低学力問題の根本にあることを改めて認識した。3年生から4年生の移行期の読み書き能力への徹底指導と同時に、英語で行われる他教科（とくに算数）の理解力を高める活動が必要であることから、今次申請事業では、小4からの英語の授業に対応できることを主な目的とした英語指導や教材を提供していきたい。特に算数については、小学生を対象としたズールー語（母語）と英語によるバイリンガル教育が必要である。

(3) パソコン技術指導

生徒だけでなく司書教師も全くのパソコン初心者であることが分かり、司書も生徒と一緒に同じレベルでパソコン指導を受けている。図書室で司書教師が生徒に指導し監督できるレベルになることが、活動継続の基盤となるが、司書がそのレベルに到達するには少なくとももう一年は必要である。また、山間部の一部対象校を除いて生徒数が増えており、今年受講できなかった生徒が多くいる。とくに、多くの学校が最終学年生（12年生）に技術習得の機会を与えているため、下級生が学ぶ機会が少ない。活動を継続していくには、司書教師からの指導だけでなく、技術を習得した生徒が他の生徒に教えるピア

	<p>ア教育のシステム確立が必要であるが、全員が全くの初心者というスタート状態において、生徒たちから指導者を育てるには少なくとももう一年は必要である。今次申請事業では最終学年だけでなく下級生を取り入れて、生徒たちの中で指導者を育てるための技術指導を重点的に行っていく。</p> <p>また、プライマリースクールの校長や教師からは、「生徒が早い時期にパソコン基礎技術を習得できるように、指導プログラムに参加したい」という要望が多く上がっている。プライマリーレベルでパソコンに馴染み、一部の生徒が指導者レベルに到達することは、事業の長期的な継続・自立性を強めることになるので、今次申請事業では、セカンダリー10校で活動を継続すると同時に、図書室の準備が整い、活動が定着してきたセカンダリー1校を追加し、6-7年生を対象にプライマリー9校でも指導プログラムを開始したい。</p> <p>上記の成果と課題をふまえて、現行事業の継続事業として、今次申請事業を提案したい。なお、今次申請事業は、学力と技能不足のために労働市場に参加できず社会的弱者となっている貧困地域の若者が経済・社会参加できるように、人材育成をする事業であることから、外務省の対南アフリカ共和国国別援助方針で重点分野である「人材基盤の強化とインフラ開発促進支援」と「社会的弱者の経済・社会参加支援」に沿っている。また、SDGsの目標4のターゲット4.3、4.4、4.6に沿った事業である。</p> <p>参考資料：</p> <p>(1) STATS SA / Local Municipality Statistics</p> <p>(2) http://www3.weforum.org/docs/WEF_Global_IT_Report_2015.pdf</p> <p>(3) http://www.hsrb.ac.za/uploads/pageContent/2929/TIMSSHighlights2012Dec7final.pdf</p>
<p>(3) 事業内容</p>	<p>ウムズンベ自治区内にある161校（プライマリー109校／セカンダリー52校）のうちの30校（プライマリー19校／セカンダリー11校）を対象に、図書室を活用した英語力向上を目指した活動を行い、そのうちの20校を対象にパソコン技術指導を行う。英語力向上については、特に英語で行われる授業が理解できるようになることを目的に、それに則した活動や教材を取り入れていく。パソコン技術指導については、継続校10校のほかに、新規校として、セカンダリー1校とプライマリー9校を対象とする。新規校の図書室にパソコンを設置しリソースセンターとして改善する。セカンダリーには、卒業後の生徒の社会参加の可能性を高めるために職業に関する情報提供・進路指導（キャリアガイダンス）も行う。</p> <p>(ア) <u>学校図書室の充実と利用</u></p> <p>日本国内では英語の本と算数セットを収集、分類、梱包し、年1回南アフリカに送る。TAAA南ア事務所を受取った本の分類整理をし、対象校30校を巡回訪問し、多様なレベルやジャンルの本を配布し、学校図書室の蔵書を充足していく。また、英語による授業が理解できるように、主要科目（とくに算数）の補助教材を現地で購入し配布する。プラマリスクールの図書室には、算数セットを配布し、生徒達が自由に算数自習のできる環境を作る。</p> <p>図書室が十分に機能し利用されているかをモニタリングし、需要に合わせて、蔵書の増加や入れ替えをしていく。</p> <p>(イ) <u>リソースセンター設置</u></p> <p>現行事業でパソコン技術指導の対象校でないセカンダリー1校およびプラ</p>

イマリースクール9校を選定し、図書室にパソコンおよびプリンターを一台ずつ設置し、パソコンスキルが学べて情報アクセスができるリソースセンターとして改善する。また、セカンダリースクールには職業に関する本を揃え、進路についての情報収集ができ、キャリアガイダンスが行えるようにする。選定候補のプライマリー校の一つは、スペースがなく図書室がないため、コンテナ図書室を設置して、リソースセンターにする。

(ウ) 英語力向上を目指した活動

(1) ブックボックス

対象校のレベルと需要に合う本を集めた「ブックボックス」を定期的に図書室に貸し出すことで、図書室の蔵書不足を補う。ブックボックスは一学期ごとに入れ替えて貸し出しを行い、数多くの本を紹介することで、読書を推進していく。

(2) 授業における図書の有効活用と英語力向上活動

対象校の教師には、生徒たちの英語力を向上し、英語による授業を分かりやすくするために、図書室の本や教材を効果的に授業に活用してもらう。当会は、そのための本や課題の選定などのアドバイスを行う。また、司書教師は、当会の図書指導員のアドバイスの下、読書会、感想文やスプリングのコンクールの開催等、英語の読み書き能力を高める活動を行う。

(3) 英語による授業への対策

図書指導員と司書教師は、プライマリー低学年生徒を対象に、小4からの英語で行われる主要教科についていけることを目的とした英語教育を行う。とくに算数に注力し、日本から送られてきた算数セットを使って、ズールー語（母語）と英語によるバイリンガル算数教育を行う。

(4) ピア教育（生徒が生徒に指導）

図書指導員と司書教師の指導と監督の下、図書委員会生徒はピア教育（生徒が生徒に指導）による英語補習活動を行う。

(5) 自立に向けた司書教師および英語教師への指導と研修会

(2)(3)について、今次申請事業終了後に司書が自立した活動ができるように、図書指導員は巡回訪問の都度、指導をしていく。また、司書教師と英語教師対象の研修会を前期と後期に一回開催する。研修会には州教育省図書部門（ELITS）の担当者にも参加してもらい、ELITSと対象校との協力体制を築いていく。

(エ) パソコン技術指導

(1) セカンダリースクール

当会のパソコン指導員Aは、継続校10校および新規セカンダリースクール1校、合計11校を巡回し、引き続き司書教師と生徒にパソコンの基本的操作技術を指導していく。司書教師と指導者生徒（将来指導者として他の生徒に指導する生徒候補）たちへは、基礎的技術だけでなく、指導方法と応用技術も指導する。

パソコン指導員の指導と監督の下、司書教師と指導者生徒は時間を決めて他の生徒にパソコンの基本的操作法を指導する。

事業終了時には生徒および司書教師への技能テスト（指導力チェックを含める）を行う。

(2) プライマリースクール

パソコン指導員Bは、新規プライマリースクール9校を巡回し、司書教師

	<p>および6-7年生の生徒たちを対象にパソコンの基本的操作技術を指導していく。とくに、司書教師と指導者生徒がしっかり技術を習得することに注力し、他の生徒に基礎的操作を指導する機会を作る。 事業終了時に生徒および司書教師への技能テストを行う。</p> <p>(オ) <u>図書委員会の活動推進</u></p> <p>図書指導員は、司書教師と図書委員会生徒たちが、現行事業で確立した運営・管理システムに基づいて図書室（またはリソースセンター）をしっかりと運営・管理しているかをモニタリングし、必要に応じて指導する。司書教師と図書委員会生徒は、他の教師や生徒に図書室（またはリソースセンター）の使い方を指導し、利用を推進する。学年末（12月）から新年度（1月）にかけて、委員会生徒の新旧交代と引き継ぎを確実に進行。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>事業開始前に、TAAA、教育省および各対象校の三者間で以下についての合意書を結ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業終了後、パソコン等の機材は教育省に譲渡される。対象校は教育省（対象地域管轄学区長）の監督下、機材の管理を責任もって行う。 ・対象校は英語力向上とパソコン技術習得のためのピア教育を継続する。 ・学校の授業にも、リソースセンターを活用したパソコン技術指導とキャリアガイダンスを取り入れていく。 ・上記の約束が守れない場合、教育省はその学校から別の有望な学校に機材を移す。 ・図書委員会生徒の新旧メンバー間の引き継ぎ作業に関しては、図書委員会の規定・方針に「学年修了時と新年度にすること」を明記することで、毎年引き継ぎが確実に進められるようにする。 <p>対象校での活動の持続発展には図書委員会の活動の継続と共に、図書室の蔵書の充実が重要であることから、州教育省図書部門(ELITS)担当者の対象校への訪問と本の配布の機会を増やすよう協力関係を強化する。また学校で必要な本が購入できるよう、州教育省および校長への働き掛けを継続して行う。</p> <p>他校、他地域への図書活動の普及については、創意工夫により比較的成本やスペースをかけずに実施できる今次申請事業を州教育省に紹介し、モデルケースとして奨励していく。</p>
<p>(5) 期待される成果と成果を測る指標</p>	<p>(ア) <u>学校図書室の充実と利用</u></p> <p>【成果】対象校 30 校の図書室が機能し、有効に利用される。 【指標】各校が決定した時間割に沿って図書室が毎日利用されている。 (確認方法) 図書指導員によるモニタリング、学校への聞き取り調査。</p> <p>(イ) <u>リソースセンター設置</u></p> <p>【成果】継続校 10 校および新規校 10 校の図書室が、運営・管理システムに基づき、リソースセンターとして有効に利用されている。 【指標】各校が決定した時間割に沿ってリソースセンターが毎日利用されている。 (確認方法) パソコン指導員によるモニタリング、学校への聞き取り調査。</p> <p>(ウ) <u>英語力向上を目指した活動</u></p> <p>【成果】・対象校の生徒の英語力が向上する</p>

・小学4年で始まる英語で行われる授業が理解できるようになる。

【指標】・各校での学年末英語試験の平均成績が前年比7%上昇する。

・小学3年生への修了時における英語による算数テスト（TAAAと対象校教師が作成）の合格者が80%以上。

（確認方法）・教育省管轄区から対象校の成績表一覧コピーを入手・分析。

・図書指導員によるモニタリング、調査およびテスト実施と採点

（エ） パソコン技術指導

【成果】対象校20校の生徒がパソコン技術を習得する

【指標】・各校で50人以上の生徒がパソコン指導員から正式な指導を受け、基礎的な操作技術を習得する。

・各校でパソコン指導員から指導を受けた生徒のうち70%以上が、州教育省が認定するパソコン操作技能テストに合格する。

（確認方法）パソコン指導員によるモニタリング、調査および技能テストの実施と採点。

（オ） 図書委員会の活動推進

【成果】図書委員会生徒が図書室（またはリソースセンター）の運営・管理・利用推進能力を身につけ、他の生徒を指導し引き継ぎができる。

【指標】・学年末（12月）に全対象校で新旧委員会生徒の活動の引き継ぎが行われ、事業終了時には新メンバーが運営している。

・全校の図書委員会が、図書指導員による引き継ぎ実践試験に合格する。

（確認方法）図書指導員によるモニタリング、実践試験の採点。